概　要　報　告

実施期日	８月　２日(水)
部　会　名	小学校　家庭部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『自分でできることをしようとし、より良い生活を創り出そうとする力を育てる家庭科教育を目指して』

提案概要

本研究は、「まかせてね今日の食事～消費者教育の視点を取り入れて～」と題し、６年生の１食分の献立を考える学習の中に、消費者教育の視点を加えたものだ。この題材の設定に当たっては、鎌倉市学校教育研究会家庭部会の「自分でできることをしようとし、より良い生活を創り出そうとする力を育てる家庭科教育を目指して」というテーマの下に、令和３年から研修や討議を経てこの題材が作られた。

Googleフォームを利用した鎌倉市内の６年生を対象とした「買い物」についてのアンケートを実施し、「買い物をすることは好きだが商品の選び方がわからない」という傾向であることが分かった。そのため、買い物の仕方（商品の選び方、基準など）を事前に学習してから実際に買い物をすることになった。買い物に関する学習は、５年生での「持続可能な暮らしへ　物やお金の使い方」の中でも行っていたが、今回の買い物では、共に食事をする人や状況に合わせた食品を選ぶことになる。そのため、献立に合う食品をどのような基準で選ぶのかを考え全体で共有する必要があった。まず自分の家庭ならどうするだろうという視点で考えることで、自分事として捉え主体的に学ぶことができた。さらに、ペアや全体で意見を共有する場を設けることで、様々な考えや思いを知ることができ、深い学びへとつながった。児童が買い物や調理実習計画を立てる中で、これまでの学習を振り返り、自分やグループの課題を見つけ改善の方法を考えるなどして、これまでの学習で得た見方・考え方を働かせることができた。これらを今後の自分の生活にいかすように指導していきたい。

質疑応答

特に出なかったが、この後のグループ協議で活発な意見共有がなされた。

協議の柱及び協議概要

協議の柱は「題材計画の工夫～つながりをキーワードに～」とし【家庭科内で】【教科と教科で】【小中の内容で】の三つの領域について話し合われた。小中合同の協議会とし、前提に異校種や家庭科を専門としない教員の参加があること等を考えた。そのため、実践報告を基に話し合いながら、幅広い視野で題材計画についての工夫や様々な取り組みを話し合ってもらうことにした。（４人１グループ）

【家庭科内で】

・被服裁縫や調理の学習に消費者教育やSDGsをつなげた取り組みは面白いと思った。家庭科は生活に関わる教科であるからこそ様々な視点と結びつけることができると改めて感じた。
・買い物についての話し合いはそれぞれの「家庭」が出る。各家庭での経験の違いやプライバシーへの配慮も必要であるし、難しい場合も考えられる。
・食生活から消費へとつなげ、実際に買い物学習に行ったのが面白いと思った。しかし、自分の学校でと考えると、時間の制限やアレルギー対応、宗教上の問題、集金の問題などがあり、難しいと感じた。
・５年生で買い物についての学習をして、それを６年生の学習にいかしたところはいいと思った。
・学校で学んだことを家で活用することの「繰り返し・積み重ね」によって学びがつながっていく。そのような学びの循環が繰り返されるようになるといいと感じた。
・中学校の提案の「縫い方の工夫を生徒自身が考える」取組は感心した。小学校では裁縫キットを購入

し、制作することが多い。手縫いやミシンの技能は身につくが、思考判断が育つのか、と感じた。児童数も多く時間も限られた中ではあるが考えさせられた。
・家庭科は体験して学ぶことができる教科なので、できるだけ体験させたいとは思うが、１人の教員が30人以上の児童の作業をみとるのは大変なことだ。そのための工夫として保護者やコミュニティスクールをうまく活用してもいいだろう。
・調理実習でのアレルギー対応はどの学校でも考慮されているだろう。今回の提案でベーコンの選び方を話し合いに使っていたが、ベーコンやハムは乳製品を含む食品なのでなぜベーコンにしたのか。代わりに考えられる食品は何か、と話し合った結果、米やだしに使う食品はどうかという意見が出た。そうなると和食の献立が有効なのではないか。
・消費者教育を深める手立てとして、ロールプレイングや動画の制作などICTの活用なども考えられるが教員の負担なども考えると難しいところもある。

【教科と教科で】
・買い物学習は総合学習とつなげてもいい。または支援教育とつなげて、買い物をする際に考える視点をさらに幅広くしてもいいだろう。また、買う場所（スーパーや商店）の方を講師に招いてお店側の視点を学ぶことも面白いのではないか。（３年生の社会とのつながり）キャリア教育とつなげても良いのではないか。横断的に学習できると感じた。
・防災食の調理をした際に災害についても学習した。災害に合った時にどのようなことに注意したらいいのか、どのようなことが自分たちにできるのかなど、社会科とのつながりも合わせて学びが深まったと思う。
・理科や算数・数学の計算問題に、家庭科の用語や内容を使うと家庭科の学習にも役立つのではないか。それが意欲向上につながったらいい。

【小中の内容で】
・小学校の裁縫で制作したものを中学校に持っていきリメイクする取組があった。学びのつながりを感じることができる。
・小中連携といわれるが、実際のところ話し合う時間も少なく、小学校としては中学校に向けてどこまでやったらいいのかと考える。また、家庭科専科がいる場合、自分が指導することがないため教える経験が持てない。
・小学校ではリクエスト給食、中学校ではお弁当コンクールという取組がある。また小学校で一食分の献立、中学校では一日分の献立を考えている。
・中学校としては「玉止め、玉結び、なみぬい」は中学校でもまた学習するので、できなくても大丈夫。家庭科は楽しいと思って来てくれたらいい。

まとめ概要

本研究では、対話による授業改善が行われたと考えている。まず、鎌倉市学校教育研究会家庭部会での教員間での対話により、消費者教育への課題意識が生まれた。講師を招いて研修を受け、授業計画を立て、対話を繰り返す中で授業改善が行われた。それにより児童が自らの見方・考え方を働かせ深い学びへとつながった。そして協議会でのグループ協議による対話でも授業改善への要素が見られた。異校種の教員が話し合うことで問題や課題に対する答えを見つけていく妥当性、これまでの指導を振り返りつつ本提案を今後にいかそうとする継続性、さらに自校での取組へと変換したり進化させたりしていく再現性の三つの要素が見られた。

指導に対する教える側の願い、思いをどう表現していくのか、ということを改めて考えるいい機会だったのではないか。見方・考え方を働かせるのは児童・生徒であるが、それを最大限引き出していく授業をどうやって構築していくかが問われている。そもそも、家庭科という教科は生活に根差したものであると共に、「楽しくワクワク」して取り組むものである。その「楽しくワクワク」する気持ちを生涯に渡って児童・生徒がもち続けていけるような授業を、小中連携して作っていきたい。その一助として小中両方がお互いの教科書を見合うことが大切だと考える。